宮津商工会議所創立７０周年記念

2035 年に向けたまちづくり提言

持続可能な美しさと豊かさを求めて

『日本海の真珠/宮津へ』

日本三景天橋立に始まり世界水準の観光都市に転換するための
観光まちづくり戦略

宮津商工会議所

まちづくり提言『日本海の真珠/宮津へ』

要旨

1　『日本海の真珠/宮津へ』都市観光に着目したまちづくり政策：

・天橋立や海の京都などの大小様々な観光資源の核として宮津を位置付け、魅力を磨く

・インバウンドを含む観光客を宮津市に集め、高度な都市型の飲食、宿泊、買物を提供

・観光の高度化を進めるために、女性/高齢者/外国人をリカレント教育で高度な観光人材として高度化、外からの人材も活用

・歴史都市宮津の歴史と文化を演出する、「宮津天橋立の文化的景観」の一層の整備

2　『日本海のグルメ都市』フードツーリズムを磨く農水産食品加工・飲食業支援：

・すでに集積した水産市場、手頃なお店から高級店まで揃った多様な飲食店の情報発信

・「丹後とり貝」「ばらずし」はじめ海の京都の旬のグルメのメニュー開発、品質改善

・グルメ都市発信のためのプロモーション戦略、「ミシュランガイド　ビブグルマン」等への登場

3　『宮津湾と宮津港の美化』世界で最も美しい湾クラブ、北前船寄港地整備：

・クルーズ船が寄港する「日本海の真珠」に相応しい湾と港の景観整備、「景観計画」策定

・「海景」（海岸景観）の活用、伊根湾と一体で「宮津湾フィルムコミッション」設立

・宮津湾航路の整備と振興、宮津/伊根航路はじめ、経ヶ岬や冠島周遊航路の開設検討

4　『博物館都市・宮津へ』博物館/美術館の整備、充実連携そして発信：

・京都府立丹後郷土資料館 Renewal による“ミュージアム都市・宮津”、街中博物館の取り組み

・北前船寄港地宮津の復元、町家活用、聖ヨハネ天主堂と寺町界隈の保存活用、天橋立と成相寺の世界遺産登録、“雪舟が描いた宗教都市宮津”の完成へ

はじめに『日本海の真珠/宮津』へ

宮津市は今、これまでにないほどに賑わっている。コロナ禍前から目立ったインバウンドが増加し、その影響もあって街中とその周辺にも飲食店が増えた。宮津駅前だけでなく、そこかしこの店に行列ができている。一方、宮津市の人口は急速に減少し、生産年齢人口はさらに減る。高齢化と深刻な人手不足に宮津の将来を悲観する人も多い。しかし都市の縮小は、まちづくりを転換する大きなチャンスになる。もう公共事業は要らない。役所や学校など公共建築は最小限に抑え、商業施設も縮小、まして宮津湾を埋め立てる必要はない。むしろ自然海岸を復原する時代になった。無駄なビルを撤去し、町並みを取り戻すことが、歴史まちづくりとして、京都を始め全国で進んでいる。

そこで、このチャンスを逃さず、宮津市を美しいまちづくりに向けて大きく舵をきることを提言する。それも日本海沿いで最も美しい街、日本海の“真珠”と言われるような美しい街を目指す。

これはもちろん、“アドリア海の真珠”と呼ばれるヴェツィアやドゥブロブニク、地中海の真珠とも呼ぶ。大西洋の真珠・マデイラ（ポルトガル)、黒海の真珠・オデッサ（ウクライナ)、ドナウ川の真珠・ブタペスト（ハンガリー）などになぞらえた。日本海沿いには、小樽や酒田、雑賀崎や松江など美しい小都市があるが、それ以上に美しい歴史都市にしようというのである。そういえるほどの歴史とそれを物語る質の高い文化遺産が宮津市にはある。今すでに、国の重要文化的景観に選定された天橋立と宮津の市街地、世界美しい湾クラブに加盟した宮津湾、伊根湾がある。それをもとに数々の文化遺産を守り、町並みを磨こうという提言である。

人口減少と日本人観光客の減少はもはやとどめようがない。しかし、インバウンドは増えている。まだ増え続けるだろう。これをチャンスととらえ、小さいけれど豊かな都市、一人当たりの市民所得で東京や横浜に匹敵する豊かな市民が住む町を目指すまちづくりの手段が、宮津市の観光まちづくりである。人口は減少するから工業出荷額は増えない。人手も足りないから観光入込客数も増やさない。一方、若年人口だけでなく高齢人口も減少するから福祉厚生費も増えない。人手不足の中、他都市より高い観光消費額、同業他社より高い利益率、少ない営業日数で、多くの客が集まり稼働率が上がる飲食宿泊事業者が増える街を目指す。それを支えるための外国人財を含む高度人財が集まるまちづくりを進めるのがこの提言である。遅れた観光産業と関連事業所を一気に改革、高度化する。

観光の高度化を進めるために不可欠なのが外国人財である。これだけインバウンドが増えたのだから、その対応ができる人材は今でも不足している。とはいえ世界的常識は、インバウンドが増えた観光地の事業所は瞬く間に多国籍化する。自然の摂理のように、当たり前に起こる変化である。インバウンドが千人来れば一人は、その土地が好きになり、定住して働き始めるともいう。その人財が芸術家の場合もあれば、料理人もいる。明治時代の宮津にはパリ外国宣教会のルラーブ神父が来て、教会と学校を創り、人財を育てた。百年以上前から宮津は外国人財を受入れ、その影響が今も伝えられている。

観光 DX は全国的に進み、そのリカレント教育の仕組みも整った。手が届くところにオンデマンド教材もある。宮津でもちりめん産業の影響があり、働く女性の比率は高い。全国的、世界的に高齢者雇用が進み、わが国でも高年齢者雇用法が改正され、2025 年 4 月から 65 歳までの雇用確保が義務化された。賃金は抑えられるものの、公務員は 65 歳定年制に、民間企業では 70 歳までの雇用が急速に普及している。

もちろん、それでも宮津市の労働力不足は解消しない。外国人財を中心に、限られた人財を観光産

業の高度に活用する戦略を理解する必要がある。幸いその端緒がすでに見え始めている。

こうした高度な“観光都市・宮津”への転換の主な点は、「美食の都市・宮津」、「海のミュージアム宮津」、「城下町宮津の再生」、「北前船寄港地・宮津の復元」、そして「カソリック聖ヨハネ天主堂」と寺町、また「天橋立と成相寺」が世界遺産登録にむけて動き出す時期には、「雪舟の描く宗教都市中世の宮津」の再発見に向けた歴史ある「芸術都市（アートの街）宮津」として完成するまでの一連の取り組みを始めることである。

ここに挙げた数々の転換は、過去 40 年の間にすでに着実に進められ、一部は成果も出ている。1987 年リゾート法の時代、宮福線が開業し、丹後リゾート構想が練られた頃から、天橋立を活かしつつ旧宮津町だけでなく現在の宮津市域をも超えた丹後全体の観光の高度化が構想された。京都縦貫自動車道天橋立宮津インターが開業した 2003 年には、宮津商工会議所は「まちなか観光」を提唱し、都心の町並み再生やアートの街づくりが始まった。夜には街中で観光客に過ごしもらう「美食都市・宮津」の実現は、思いの外早く実現された。その一方、2007 年には天橋立世界遺産の取組みが始まり、宮津市と京都府は重要文化的景観の選定を果たし、2026 年にはその中心となる府立郷土資料館がリニューアルされる。転換はすでに着手され、その成果を一気に実らせる時期が来た。

折よく、京都市ではインバウンドが溢れている。JR と Willer Trains、バスやレンタカーで宮津を訪れるインバウンドは、当面増加の一途をたどるだろう。その対応で観光事業者の DX 化を進めるだけでなく、美しいまちづくり政策で「日本海の真珠」として輝く美感都市と美食都市、芸術の街をめざす、市民・事業者・行政が一体となった取り組みを始めれば世界中の人々の注目を集めるだろう。

宮津や丹後に注目して、住み着き活動する外国ルーツの人々がすでに増えている。それは、宮津がただの田舎町ではないからである。まだ登録されてはいないが、日本の他の世界文化遺産に負けない文化的価値があり、雪舟のような芸術家にインスピレーションを与える天橋立の街、小さいけれどもヴェネツィアに匹敵するほどのポテンシャルを備えた都市であることに気づいているからであろう。世界中から集まる人々の力も借りて、市民事業者の手で宮津を再び輝かせる具体的な提言をまとめた。

ヴェツィアの総督府（Palazzo Ducale）、サンマルコ寺院、同広場など、イタリア

２．宮津市観光まちづくり戦略への提言

これから当面の観光政策の目的は、増加するインバウンド客を獲得し、その滞在期間を伸ばし、消費額を上げることにある。とはいえ、人手不足はますます深刻化し、外国人労働者の確保とその養成にも限りがあるのだから、総客数を抑えて、上質な顧客を確保する戦略が求められる。

観光の中心である天橋立には、これ以上の宿泊施設を増やせない。そのため限られた上質な施設中心の観光地に維持する策が要る。古くから栄えた観光地・天橋立は、もとより多くの文人墨客に愛された歴史があり愛でられた老舗旅館が多い。また近年は、時代やニーズにあった付加価値の高い施設整備に取り組んでいる宿泊施設も多い。その代わりに、宮津都心部や市内周辺部の宿泊施設にも適度に宿泊客を分散させる戦略が要る。そのため、天橋立への過度な集中を避け、城下町、北前船寄港地などを際立たせ、客数は抑制して客種の多様化を図る観光まちづくり策を提言する。

2-1. 地中海の真珠ヴェネツィアをめざし日本海クルーズに欠かせない寄港地とする

宮津の観光まちづくりが目指す都市の一つ、イタリアのヴェネツィアにはクルーズ船が寄港する。中世紀元の世界的な歴史的市街地にはもちろん接岸せず、沖泊め、小船で上陸する。地中海クルーズで人気の寄港地は、他にも、バルセロナ、ローマ（チビタベッキア)、サントリーニ島、イスタンブールなどがある。各都市には、遺跡、美しい景色、活気ある文化体験など、多様な魅力があり観光客を惹きつけている。

ヴェネツィアのサンマルコ寺院は、エジプトのアレキサンドリアから移された聖マルコの遺骸が安置され、中世から盛んに巡礼が訪れる街だった。また、度重なる十字軍がエルサレムに出征した港でもある。バルセロナには世界文化遺産のサクラダ・ファミリア教会がある。どちらの町も地中海クルーズには欠かせない。欠かせば乗客が集まらないからである。接岸する岸壁は舞鶴港、宮津市は地中海ならぬ日本海ではあるが、その真珠を目指さなければクルーズ船から見向きもされない。舞鶴に寄港するのは京都に近いから、今は日本海クルーズの初動期、お試し期間中である。運よく伊根湾と宮津湾に関心を示してくれたが、寄港しなければ客が集まらない訳ではない。町の魅力が磨かれなければもう来ない。チャンスの女神に後ろ髪はない。見るところ、その瀬戸際感が宮津にはない。

考えて見れば、急増するインバウンドもチャンスの一つ、飽きられる怖れがある。京都や大阪の周辺には宮津以外にもインバウンド獲得を目指した観光まちづくりを進める町は多い。食では北海道の小樽と余市、秋田、山形の酒田と鶴岡は食文化でユネスコの創造都市のタイトルを得た。新潟もそれを追いかけている。海景では富山湾や駿河湾が立山連峰や富士山の美しさを誇り、その恵みで海の幸が豊かだという。瀬戸内海の島々も美しい。さらに瀬戸内国際芸術祭がすでにインバウンドを集めている。海から見た城郭が美しいのは高松と今治、大分県の中津を加え三大海城、どれも瀬戸内海にある。国内のどの都市も城郭も、クルーズ観光の本場・地中海に倣い、ユネスコの創造都市や美しい湾クラブに加盟し、世界から学ぼうとしている。

地中海の寄港地バルセロナの魅力はガウディのサグラダファミリアやグエル公園にある。カトリック宮津教会 聖ヨハネ天主堂は、比べようもなく小さい。ただ、その物語を掘り下げれば 19 世紀のヨーロッパに繋がる。1882（明治 15）年に着工したサグラダファミリア聖堂の二代目の建築家がガウディ、1896（明治 29）年竣工の宮津の天主堂とほぼ同じ時代の教会でもある。

クロアチアのドゥブロブニクも人気の寄港地、日本人観光客も多い。城塞が聳える小さな港湾都市で中世のヴェネツィア共和国が支配し、築いた。「アドリア海の真珠」とも呼ばれる美しい街。落ち着いたたたずまいの美しい町並みは、宮津都心の将来の町並みが目指す姿であろう。そして、ギリシャのミコノス島は、白い家々や風車が並ぶ美しい島で、サントリーニ島と並ぶ東地中海、エーゲ海を代表するリゾート、白壁ではないが伊根の舟屋の町並みが目指すべき姿、特に海から見た眺めを大切にしてほしい。

2-2. フードツーリズムを磨き農水水産加工・飲食業で世界の注目を集めるグルメ都市づくり

宮津市は農産物、海産物、水産加工品、そして酢や酒、一時は醤油まで多様な食材を産出する都市である。日本三景の名勝天橋立があまりに有名だったためだろうか、食だけで観光客を集めようという発想が薄かったのだろうか。戦後、兵庫県香美町で始まったカニと温泉観光でも丹後の他の観光地と比べると出遅れ感があるように見える。もちろん、昔から料理旅館や料亭が集まる天橋立と宮津はグルメが集まる町だった。

それが近年になり、一気に世界的に注目されるグルメ都市に変貌した。それ以外の普通の飲食店の数も急に増えている。そのためこのグルメ都市宮津の動きを定着させ、持続させるために、宮津市とともに宮津商工会議所はグルメ都市づくりを一層推進していく必要がある。

世界的には、ユネスコ無形文化遺産条約による一覧表に登録された「和食－日本人の店頭的食文化」（2013 年登録）と「伝統的酒造り」（2024 年登録）があり、宮津市は古来の御食つ国若狭と隣接、同じ若狭湾の豊かな海産物に恵まれている。和食文化の中心京都の料理人との交流も盛んで、和食文化に関心のある若手料理人が集まる地でもある。

同時に、天橋立ワインの産地でブドウ畑もワイナリーがあり、昔から酢醸造も盛ん、最近はアチェート（aceto/ワインビネガー）もある。オリーブ畑が広がり、温暖化が進めばシチリア・オレンジやバジルやラベンダーなどのハーブ栽培を進め、瀬戸内海の小豆島以上に地中海的な土地柄になるだろう。南仏料理のブイヤベースやイタリア料理のズッパ・ディ・ペッシェが宮津の名物料理になるだろう。外国人財を上手に活用すれば、養殖漁業を通じて、多品種少量生産の水産業を発展させられる。この点は、今後もっと議論されなければならない。

2-3. 世界で最も美しい宮津湾は宮津港の美化で進める

2003 年国土交通省が発表した「美しい国づくり政策大綱」は、その後 2004 年景観法、2007 年歴史まちづくり法に先立ち、国が示した新しい国土政策の転換点を国民に示したものである。その中で、わが国の経済は目覚ましい発展を遂げたとしつつも、四季の変化に富んだ自然景観や天橋立に代表される数々の名勝などの人文景観、そして歴史的建造物や町並みの美しさに比べ、戦後造られた人工景観は著しく見劣りがすると述べ、国を始め全国の自治体の公共事業もその最たるものであるとした。2000 年代初頭の国土の姿は、確かに醜悪だった。その後四半世紀を経て、美しい国づくりは一気に進み、すっかり美しく変わった京都市はインバウンドを集め、その一部が訪れる宮津の街中も少しずつ美しさを取り戻している。景観法と同時に改定された文化財保護法の文化的景観保護制度による整備事業も進んでいる。残された課題が海景、海の京都を代表する宮津湾を美しくする取り組みである。著しく見劣りがする人工景観、埋立地のコンクリートの海岸線である。

2000 年代当初の政策大綱に記載されながら、美しい海岸線を取り戻す議論が進まなかったのは、

2011 年東日本大震災の大津波の被害と、その後の復興事業があったからである。復旧を急ぎ、津波を防ぐ巨大な防波堤を、膨大な国費を費やして築きあげた。膨大な土砂を運び、高台に集落を移した。多くの関係者の多大な努力の成果は、しかし東北地方の人口減少で、急激な過疎化の波にさらされている。人の住まない集落に聳えたつ防波堤、半分の区画も埋まらない新市街地と漁船のいない最新設備の漁港の景観が、公共の営みのむなしさを見せている。大震災から間もなく 15 年、阪神淡路大震災からすでに 30 年が経ち、国土強靭化のあり方も見直しが始まった。

現在の宮津港は、京都府が管理する府内 4 地方港湾（他に久美浜、舞鶴、伏見）の一つである。港内には、獅子地区、鶴賀地区、島崎地区、漁師地区、日置地区、江尻地区、文珠地区などがあり、阿蘇海とは文珠水路でつながる。鶴賀には第 1 埠頭、第 2 埠頭の岸壁と物揚場がある。要するに宮津市の海岸部ほぼすべてを地方港湾として京都府建設交通部港湾局が管理している。

京都府は、宮津港では長年「天橋立サンドバイパス事業（海岸環境整備事業）」を通じて天橋立の砂嘴の砂浜を復活させようとしてきた。加えて、宮津港海岸環境整備事業として、宮津市天橋立と日置の間の 1970 年前後に建設された護岸が老朽化したため改築を行っている。もちろん、丹後天橋立大江山国定公園内の特別名勝天橋立に連単する海岸であることを自覚し、護岸を緩傾斜で整備し、併せて遊歩道を整備することで景勝地にふさわしい景観を創造し、海浜利用の増進を図るという。その成果が、世界で最も美しい湾と呼ぶにふさわしい国際水準にあるか、地元自治体としても厳しく監視しなければならない。

一方、海岸堤防等老朽化対策緊急事業として、宮津市日置で施設の老朽化、波浪の影響で損傷した箇所の機能回復と強化を進めている。これが、美しい国づくり政策大綱にいう「著しく見劣りのする公共事業」になっていないかも点検しなければならない。国が美しい国づくり政策大綱で美しい国に大きく舵を切り、京都市は 2007 年の新景観政策で美観地区、風致地区を強化し、京都商工会議所が提唱した「美感都市」を実現した。この分野での京都府の取り組みはあまり聞かない。京都市内の風致地区内砂防工事では市の審議会の指導があり、事なきを得た件は記憶に新しい。地元宮津市と宮津商工会議所の厳しい監視が欠かせないことを強調したい。

京都府は、現在伏見港で国交省による淀川水運の復活を機に、「みなとオアシス」登録した。日本では珍しく今も供用される河川港として、伏見港の歴史的景観整備を進めている。国交省の支援で、既存の公園の美しさをさらに追求、新たな誘客と賑わいの創出を目指した伏見港の再生を進めている。いうまでもなく、観光客の京都への過度の集中を分散させるため、伏見稲荷から琵琶湖疏水の一部・鴨川運河沿いに南に景観整備を進め、伏見の酒蔵の町並み、そして淀川舟運を復活させ、京阪間の淀川沿いの観光振興戦略である。

ぜひ次は宮津湾（阿蘇海を含む）の「みなとオアシス」を進めるべきである。世界で最も美しい湾クラブ加盟はその条件整備になる。クルーズ船受入れを行政が進めるとは、船会社に挨拶に出向くことではなく、目に見えた成果を上げ、港の美しさが世界に知られるように努めることであろう。

宮津湾航路の整備と振興、宮津/伊根航路はじめ、経ヶ岬や冠島周遊航路の開設検討や「宮津湾フィルムコミッション」の設立なども考えられる。しかしその前提として、宮津市は美しいまちづくりの追求を真剣に考えなければならない。

伊根の舟屋が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されてすでに 20 年、地区内の 230 軒の舟屋が保存されている。今ではインバウンドが増加している。しかし、伊根湾はもとより宮津湾がより美しくなければ、いつまでも観光客は来ない。舟屋の重伝建地区だけが守られても、コンクリートだらけ

の護岸に囲まれた海岸は美しくない。美しい国づくりに取り残された全国の観光地はすでに衰退した。今や美しくなければ観光地にはなれない。

2-4.『博物館都市・宮津へ』

現在、京都府立丹後郷土資料館のリニューアルが進んでいる。長年の天橋立世界遺産登録推進事業も次のステージに差しかかった。2024 年山陰海岸ジオパークも再認定された。世界で最も美しい湾クラブへの加盟も認められた。天橋立宮津の文化的景観は十周年を経た。両隣の伊根町伊根浦と与謝野町ちりめん街道の二つの重要伝統的建造物群保存地区は、2025 年選定二十周年となる。

これだけ揃ったタイミングでの“ふるさとミュージアム丹後”のリニューアルである。郷土資料館が丹後国府跡の史跡の地から宮津市とその周辺のフィールドに広がり、美しい宮津市に転換する機運が高まっている。“ミュージアム（博物館）都市・宮津へ”と発展することは、インバウンド客を迎え、少しでも長く滞在し、宮津の歴史と文化を体験、体感してもらう観光まちづくりの核心になる。

世界遺産登録を目指す天橋立とその周辺の整備は言うまでもないが、文化的景観に含まれる宮津市中心部は“街中博物館”に向けた取り組みが求められる。まず、時間はかかるが「北前船寄港地宮津の復元」に取り組みたい。2009 年に「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業「宮津花街ピント館」は 15 年たって「四軒町ピント館」として活用され、現在では飲食店となった。その朝の賑わいをみれば、寄港地の花街の歴史が戻ってきたようにも見える。また、その後整備された「道の駅海の京都宮津」の施設は、町家風のたたずまいで寄港地が商いの場であったことを感じさせてくれる。どちらも文化財ではないが、寄港地宮津の歴史を活かしたまちづくりの成果である。だから、観光客が立ち寄るフォトスポットになっている。

もちろん本物の文化財もある。宮津城の遺構があり、国の重要文化財「聖ヨハネ天主堂」がある。寺町界隈の町家の町並みの保存活用も民間事業として進んでいる。天橋立と成相寺の世界遺産登録が進んで、その周辺整備事業として、“雪舟が描いた宗教都市宮津”が完成するまでには、宮津市内もすっかり歴史都市の装いを新たにすることだろう。ここまで揃えば、日本海沿い各都市の中で有数の宮津市、日本海の真珠の風格が出てくる。

加えて、1962 年竣工の宮津市役所は、峰山長出身の沖種郎設計で、DOCOMOMO Japan により戦後のモダニズム建築に選定され、保存が強く求められている。前川国男設計の京都市岡崎のロームシアター京都（旧京都会館）に匹敵する有名な現代建築である。1964 年竣工の伊賀上野市の旧上野市役所は坂倉準三設計で今は保存再生が進んでいる。ホテルと図書館にリノベする計画だという。現・宮津市庁舎の将来に向けた活用の議論が始まっていい。ロームシアターや上野市庁舎はリノベして観光客を集めている。今の宮津、これからの宮津に必要な施設になるだろう。宮津駅と都心の結節点に建つ街中博物館になり、観光の可能性を広げる。そのためには、最小の公的資金で民間活力を導入し、専門家の支援を仰ぎ、世界的にも注目を浴びる歴史的建造物の活用事例とするべきであろう。

2027 年の京都府立丹後京都資料館のリニューアルオープンに向けた取り組みが進む中、宮津市への今回の提言では、町全体がフィールドミュージアムを目指すことを強く望む。

ドゥブロブニク（クロアチア）

ヴェネツィアの運河にクルーザー客船

世界遺産大浦天主堂（長崎）

カトリック宮津教会聖ヨハネ天主堂

サンセバスチャン（スペイン/バスク）

バルセロナ（スペイン/カタルーニャ）

３．宮津の魅力を掘下げ、一つ一つを世界水準にするための方策

3-1. 宮津城下町を活かした歴史まちづくり（旧城下町/町人地と寺町の保存と再生）

宮津の歴史は、古く天橋立が形づくられた時代に遡り、奈良時代には丹後国府が置かれた府中一帯が中心だった。その後、14 世紀には丹後の守護に任じられた一色満範が納めたが、16 世紀末に細川氏が代わり、丹後を平定し、宮津城を築き、城下町を開いたという。その痕跡は、地表ではほとんど確認できないが、絵図と発掘調査からその規模が明らかにされ、痕跡も次々と見つかった。特に、京極氏時代に再建された宮津城の近世城郭の絵図が多く残されており、本丸、二の丸、三の丸からなる縄張りがわかる。

大手川は右岸の宮津城内と左岸の城下町を分けていた外堀で、2004 年の水害後、治水事業で 260m の白壁が整備され「しらかべの道」と呼ばれている。一画には大手門が置かれ、大手橋を渡ると本町と万町に繋がり、場内と違い今も西岸には江戸時代の町割りが残っている。新浜、魚屋町、小川町、紺屋町、金屋谷、白柏町、河原町、川向町などの名は今も呼ばれる。加えて、寺町はほぼ宮津城下絵図（1703 年）の通り残されている。

城内と上級武家屋敷跡地は、明治初期に警察署や監獄、裁判所、与謝郡役所等の行政機関が建ち、1924（大正 13）年に丹後鉄道が開通し宮津駅が開業した。そのため前世紀、全国の城下町で城跡を整備し天守閣が復原された時代には宮津城本丸は失われたと言われた。しかし、地下の遺構は埋蔵部下財で、今後調査が進めば史跡（文化財）に指定し再整備が進むだろう。そして、2008 年以降の歴史まちづくり法の時代となり、天守閣でなく「城下町」を活かしたまちづくりが全国で進んでいる。明治維新で藩は廃され､大名とその重臣が去った後、150 年以上に渡りその町に歴史を刻んできた商工業者の城下町が現代にもつながる歴史まちづくりの中心だからである。

古臭くなった自動車交通優先の昭和の都市計画を廃し、掘割を復原する城下町も多い。中でも宮津市では 2014 年「宮津天橋立の文化的景観」が国の重要文化的景観に選定され、城下町一帯がその保護区域に含まれている。今では文化財調査も進み、城下町とそのまちづくり手法も多様に発達した。また、今後は区画整理や市街地再開発事業はもとより道路整備の予定もない。そうなれば、全国の美しく小さな城下町、弘前、角館、川越、津和野、萩、杵築、近くでは出石や近江八幡と比肩する城下町宮津を、長期的に目指していくことが都市計画の基本方針にあげられるべきだろう。

なお、宮津城下町は一色満範、細川忠興､京極高広等のよく知られた歴史上の人物に所縁があり､永井家､阿部家等の歴代城主にも歴史があり物語がある。他の多くの城下町のように、その物語を掘り起こすこともまちづくりの一つになる。

とはいえ、現在の城下町のまちづくりは、一部の城郭愛好家と違い、城郭の縄張り掘割、石垣、まして天守閣や櫓には目もくれない。城下町は、市の様子、町名と商いの歴史、酒や味噌醤油の醸造の老舗、和菓子や茶舗を通じた食文化、伝統工芸の面から注目されることが多い。社寺もその町の信仰の歴史を伝える文化遺産として見られる。城下町には禅宗と真宗の寺院が揃う。宮津でも臨済宗妙心寺派の智恩寺、浄土真宗本願寺派の教念寺、願性寺、曹洞宗が智源寺、他に日蓮宗が 9 寺ある。歴史も由緒もある神社が揃っているのも特徴、天密修験道の地である天橋立ゆえに日枝神社がある。宮津の土地柄を語る上では欠かせない文化遺産である。戦争好きな男子が優勢だった戦中戦後と違い、今はすっかり平和が根付いた。まして、観光まちづくりで戦争は禁物である。

さらに、近年の歴史まちづくりでの城下町再生では植生を再現にも取り組んでいる。城下町では、城を中心に武家屋敷、町人地、寺社地などが配置され、それぞれに異なる植生が見られた。武家屋敷には庭園が発展し、庭木や観賞用の植物が植えられた。一方、町人地では、生活に密着した樹木や野菜、果樹などが栽培されていた。また、寺社地には、鎮守の森では自然の植生が残された。

宮津にも武家屋敷の庭の名残の松、モミジ、シャクナゲ、キンモクセイ、サザンカが残る。今に続く町人地には、ケヤキ、イチョウ、ムクノキなどが生き残っているた。ミカンやカキなども栽培されている。また、城下町周辺には今も田畑が広がり、米や麦、野菜などが栽培されていた。川や池の水辺に生息する、ハス、ガマ、ヨシなども城下町の記憶の一端であり、歴史まちづくりには欠かせない。

景観法では、景観重要建造物と並んで景観重要樹木を選定する制度を定めた。宮津のような小さな城下町では美しい植栽が景観の重要な要素になる。

3-2. 北前船の寄港地のまちづくり（日本遺産「北前船寄港地」を軸に他の寄港地と交流し、宮津港を発信）

宮津は、江戸時代には北前船の寄港地として栄え、日本海側有数の港町として発展した。丹後ちりめんや海産物、酒、酢や醤油等の醸造品を産し、日本海を西にも東にも商いを広げた廻船問屋の蔵が並ぶ街だった。

また、水主、船頭や船子が人夜を過ごす新浜の花街のたたずまいが今も残っている。「宮津節」が知られ「あいやえ踊り」をはじめ北前船によってもたらされた伝統芸能が伝えられる。「宮津おどり」は今も夏に欠かせない市民が楽しむ盆踊りでもある。

2017 年「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」として、宮津市は 49 自治体とともに日本遺産に登録した。それに先立ち、関西大阪 21 世紀協会の支援で「北前船寄港地フォーラム」にも参加し、松前から大阪まで日本海と瀬戸内海の寄港地の様子も伝わってきた。そうしてみると、寄港地の中で宮津は際立っている。それは、港湾機能が今も残り、かつて北前船が運んだ絹織物、海産物、酒醤油酢を産し、かすかにはなったが花街のにぎわいが残り、その芸能が今も受け継がれているからである。有形も無形の文化遺産がフルセットで揃った北前船寄港地といえる。

水主集落と蔵が並ぶ町並み、倉庫群や港の灯台、北前船の絵馬が残る社寺等と、一つ一つの文化財でみると宮津港より優れた遺産をもつ寄港地は多い。しかし、江戸時代中期から明治時代にかけて二百年に渡り日本海を航行した北前船の寄港地の雰囲気がもっとも色濃く残る寄港地が宮津であるといえるかもしれない。加えて、東京、名古屋、京阪神の三大都市圏から近く、観光施設がよく整っている点も大きい。日本遺産の北前船の寄港地の特色を活かすことも、宮津の歴史文化のまちづくりに欠かせない要素である。

2007 年に始まった「北前船寄港地フォーラム」は日本海各地で開催され、2014 年には第 15 回北前船寄港地フォーラム宮津大会が「つなぐ・結ぶ～北前船からのおくりもの～」と題し開催された。2024 年 11 月には加賀市と福井県で第 35 回が開催された。寄港地は、日本海沿い小さな歴史都市、函館、松前、江差、小樽、余市、酒田で、歴史まちづくりが進でいる。宮津以上に知名度の高い歴史都市もあるが、関西都市圏への近さは今成長しているインバウンド観光の時代には有利である。宮津が日本海の真珠として、その美しさを誇れば、他の都市も影響され、北前船を通じたつながりが広がる

3-3. 美しい湾クラブ、自然美と生態系、天然記念物（冠島のオオミズナギドリ）を活かす

宮津湾と伊根湾は、2016 年 11 月に世界で最も美しい湾クラブの加盟が認められた。現在 25 の国と地域から 44 の湾が加盟している。日本からは 2013 年松島湾、2014 年富山湾、宮津湾と同じ 2016 年に駿河湾が加盟し、2018 年に長崎県佐世保市九十九島湾の五つの湾が加盟している。

このクラブは「湾を活かした観光振興と資源保護、そこに暮らす人々の生活様式や伝統の継承、および湾の景観とその海の環境保全」を目的に 1997 年設立され、フランス・ブルターニュ半島のヴァンヌ市に本部を置く国際 NGO でその活動はユネスコも認知している。クラブへの加盟資格は、①優れた自然の美しさだけでなく、②豊かな生態系、③経済的潜在力、④国と府市町で法的保護制度があり、⑤世界遺産の評価基準の水準に近づけようとしている点だという。

宮津市は「天橋立世界文化遺産」を長年推進し、すでに文化財保護法による「文化的景観」の保護制度を整えた。また、2024 年には「宮津市資源循環の促進等に関する基本的な指針」を示し、湾の海洋環境保全のため地域住民、関係団体、行政が連携し、様々な取り組みが行われている。海岸清掃活動、流域一帯の環境配慮、海岸ゴミ対策、砂浜確保による生態系維持などがある。阿蘇海の環境改善に向けた取り組みもすでに長年行われてきた。

UNESCO 世界遺産登録、世界で最も美しい湾クラブ加盟は、いうまでもなく、宮津市の天橋立と宮津湾を世界的に知らしめようという取り組みである。その歴史・文化的価値、美しい景観、豊かな自然生態系を世界に誇る湾だと主張する。世界を代表する 25 の湾の一つで、日本国内でも先進的 5 湾の一つとして世界的にも高いレベルの保護制度をもち、保護策を講じているというのである。宮津市のこれまでの熱心な取り組みを世界的に位置づけ、インバウンドの高い評価と尊敬を集められるよう活動の継続が必要である。

もちろん、宮津湾と伊根湾は一体、一衣帯水である。丹後海陸交通伊根航路は宮津・天橋立と日出を経由して両湾を結んでいる。将来の世界遺産の文化的景観と国の重要伝統劇建造物群に選定された舟屋の町並みを回り、その航路は宮津湾の海景の世界的美しさを体験できる貴重な手段である。今は夏の 10 週間に毎日二往復だけの運行であるが、通年で日に十往復程度に増便できるポテンシャルが期待できる。宮津湾周辺の経済的潜在能力は決して低くない。丹後郷土資料館がリニューアルされ、食の魅力一層高まり、インバウンドの伊根湾での滞在時間が伸びる将来には、宮津の城下町や北前船寄港地の訪問客も増え、宮津湾と伊根湾を行き来する人々が増えることが十分期待できる。

将来は、世界で最も美しい湾サミット（国際会議）「青い海、緑の街（Blue Sea, Green City）」の誘致も考えられる。すでに、2002 年には「半島振興法」の対象地域を集めた全国半島会議が丹後半島を擁する宮津市開催され、米国やイタリアなど海外から専門家を招聘した経験がある。

3-4．聖ヨハネ天主堂は、国の重要文化財建造物、日本で 2 番目に古い木造聖堂、プティジャン神父のパリ外国人宣教会のルイ・ルラープ神父の教会、世界文化遺産にもなった長崎の教会堂、隠れキリシタンの物語と繋がる。

カトリック宮津教会は 1896 年の建立、日本最古の木造教会堂として、2024 年 1 月に国の重要文化財となった。しかし、その秘めたる潜在的価値は測り知れない。北前船寄港地であった明治の宮津町はパリ外国宣教会が重要視した拠点でもあった。その信者の方々はご存知だろうが、当時このパリ外国宣教会がフランスから日本に派遣されたルラーブ神父自らが設計し、地元の旧家・田井氏が寄付した土地に建てられた。

パリ外国宣教会（Missions étrangères de Paris, MEP） はパリに本部を置く宣教会で、16 世紀日本に布教したフランシスコ・ザビエルの属したイエズス会士アレクサンドル・ドゥ・ロードが、17 世紀後半にローマ教皇アレクサンデル 7 世の支援を受け、総勢 17 名のフランス人司教をアジア宣教に送り出したことに始まる。現地本部はタイのアユタヤにあり、トンキン（ベトナム北部）、コーチシナ（同南部）、カンボジア、タイ、中国の一部で宣教を行った。幕末日本の開港を見て、宣教会は 1859 年（安政 6 年）のジラール神父ら再宣教のために横浜に送った。1862 年（文久元年）1 月には近代日本初の教会となった横浜天主堂（カトリック山手教会初代聖堂）が献堂された。1863 年 1 月末には、ルイ・テオドル・フューレ神父が長崎に赴き 1864 年（元治元年）12 月末に大浦天主堂を完成させた。フューレ神父に代わり天主堂を完成させたベルナール・プティジャン神父が初代主任司祭となった 3 か月後の翌 1865 年（慶応元年）3 月、イサベリナ杉本ゆり等ら長崎浦上村の隠れキリシタンたちが天主堂を訪れた。プティジャンに信仰を告白し、隠れキリシタンたちの存在が世界に発信された。250 年間の迫害を超えたキリシタン発見として大きな驚き与えただけでなく、市民革命をへて衰退の極にあったフランスのカソリック教会を勇気づけ、イタリア統一（リソルジメント）で膨大な教皇領を失い、極狭いバチカン市国に閉じ込められた教皇自身をも勇気づけたという。プティジャンは再宣教後初の日本司教となり、パリ外国宣教会はカトリック世界の期待を一身に集め、日本での布教に努めた。

ジャン・ルイ・ルラーブ[1]はリヨン郊外に生れ、5 歳の時に自らの教会で二十六聖人の列聖の話に感銘、パリ外国宣教会に入り、1885 年に日本を訪れると、京都、宮津、岡山、豊岡、舞鶴で司祭として活動した人物である。宮津町への赴任は 1888 年（明治 21 年）年、それから 52 年間宮津で働いた。1890 年（明治 23 年）には豊岡町、1891 年（明治 24 年）には舞鶴に仮教会を作り、1896 年（明治 29 年）に宮津町にロマネスク様式のカトリック宮津教会聖堂を建立した。横浜天主堂の 34 年後のことである。1907 年（明治 40 年）には、成田有能の協力を得て教会構内に宮津裁縫伝習所を創設、後の 1927 年（昭和 2 年）に暁星裁縫女学院、暁星女子高、現在の京都暁星高校である。ルラーブは北丹後地震では罹災者の支援に当たったことも知られる。

隠れキリシタンの地、長草と天草の潜伏キリシタンの関連遺産群は 2018 年に世界遺産に登録された。構成資産の一つ外海の出津教会、大野教会ではドロ神父の活躍が今も伝えられている。フランスとの交流も続き、西海の辺境でキリシタン再発見の歴史を伝えている。宮津教会はもっと知られるべき価値を持っているし、現在の「パリ外国宣教会」にとっても忘れえない重要な場所の一つだろう。これまでどのような事情があったかは知らないが、当時の宮津の繁栄あってこその日本近代史の重要事件であるといえよう。

「木造で畳敷きの珍しい教会」という説明ではまったく足りない。数多くの「和洋折衷」建築の一例で片付けていい文化財建造物でもない。キリスト教は日本にどう伝わったのか、ヨーロッパと日本の

---

1 ジャン・ルイ・ルラーブ（Relave, Jean Louis 1857-1941）1857 年 12 月 17 日フランス南部リヨン市郊外のサン・テアン村で生まれた。日本の二十六聖人がローマ教皇ピウス 9 世に列聖された 1862 年、5 歳のルラーブは村の教会で二十六聖人に献げられた小さな赤玉のロザリオをもらい日本人のために祈ったという。その後、パリ外国宣教会経営の神学校に学び、1885 年司祭となった。ただちに、宣教師として日本に派遣され京都において伝道生活を送った。のち、宮津教会に転任し生涯を同地ですごした。キリスト教布教のかたわら教育活動にも熱心で暁星女子高等学校を創立するなど女子教育に献身した。1940 年健康を害し大阪の聖母病院で加療中翌 1941 年 2 月 1 日死去。行年 83 才。遺言により遺骸は宮津に運ばれ惣村の教会墓地に埋葬された。墓前に詣でた上智大学教授 H.ホフマンの美しい文章があるいう。

関係の中で、イエズス会やパリ宣教会が宮津にどのような足跡を残したのかを知り、国際都市・宮津を再評価すべきだろう。世界文化遺産だけでも、前述の長崎と天草の潜伏キリシタン関連資産の他に、フィリピンのバロック様式教会群、マラッカ（マレーシア）の教会群、インドのゴアの教会群と修道院、澳門（マカオ）聖ポール天主堂跡などがある。アジアからのインバウンドにとって聖ヨハネ天主堂には、地元の世界文化遺産の聖堂に匹敵する歴史的価値がある。少なくとも、長崎の世界遺産大浦天主堂などと並ぶ貴重な日本の教会建築遺産である。また、ルラーブ神父は列福に値するだろう。長崎の外海ではマルク・マリア・ド・ロ神父の物語が今も伝えられる。グローバル化が進む中で、近い将来必ず発掘、評価される文化遺産であることを強調したい。

3-５．美食の都は、養殖業と定置網、延縄漁の特長と水産加工品に缶詰、醸造業では酒、酢、醤油からワイン、この 20 年間に橋立地区以上に宮津市内の飲食店が増加、グルメの街が見えてきた！

20 世紀の宮津市では観光は天橋立、宮津駅周辺はビジネス街というイメージが強かった。中心市街地と呼ばれる都心商業にもまだ活力が残り、本町や中町の商店街組織が活動を続けていた。とはいえ、人口減少に向かい、買物客の減少は止まらず、街を商業から観光客を受入れる飲食・宿泊業を中心とするまちづくりが始まった。それがこの四半世紀、目覚ましい勢いで発展した。店があまりに急に増えたので、関西一円にもまだ十分には知られていない。

当初の狙い通り、地元客から市外からの客への切り替えが進んだ。狙いでは、はじめは地元客に外食をしてもらい飲食店の数が増え、質的にも向上した上で市外の客に評価してもらおうと考えていた。しかし、地元客が増える前に市外客が一気に増えた。それは、宮津の食材への期待が高かったからだろう。海の京都のイメージも強かったことも後押しになったのではないか。

そのため、この突然成長したグルメタウンを定着、持続させるために、宮津市としても宮津商工会議所としても全力で支援していく必要がある。

「美食の都・宮津」には、豊かな水産資源とその加工業と高い技術、また丹後一円の農産物、加えて多様な醸造業がある。酢、酒が今も生産され、味噌と醤油業の歴史もある。もちろん、城下町として、北前船寄港地として、日本三景天橋立の観光地としてどの時代にも飲食宿泊業が営まれ、料理人が揃い、宴会料理も盛んだった。その宮津がこの四半世紀、国際的に注目されるレストランやホテルが進出するグルメ都市になった。この提言で、最も強調したい点の一つがこの点である。グルメの魅力が 21 世紀の宮津経済を支える最大の力になると予言したい。それは、日本のサンセバスチャンと呼ばれる宮津になることでもある。

国内各地にサンセバスチャンを目指す取り組みがある。千葉県いすみ市、三重県多気町、浜松市、横浜市野毛などである。いすみ市は「サンセバスチャン化計画（美食観光都市づくり）」を推進し、多気町にはスペイン・バスク料理を提供する「サンセバスチャン通り」が複合商業施設 VISION 内に開かれた。農林水産業出荷額が全国有数の浜松市は、地元産食材を活かした「美食の街」推進事業を展開しサンセバスチャンを目標としている。そして、すでに丹後地方も「日本のサンセバスチャン」と呼ばれ始めている。人口規模や地理的条件、海と山の幸が豊富であることなど、サンセバスチャンとの共通点が多いからでもある。その中心は宮津市を置いて他にない。そもそも丹後の入口、丹後で最も観光客が集まり、飲食宿泊業が集積し、今もその成長が続いているからである。この有利さだけをみれば、宮津市が人口減少に苦しんでいることなど霧消してしまう。

宮津商工会議所は「宮グルメぐる」事務局を主宰し、街中の飲食店情報を発信しているが、サイトの

公開以降、毎年アクセス数は増加しており、飲食店の開店も増加傾向にある。国内はもとより、海外からも料理人が宮津を目指して進出しているようにも見える。美食の都・宮津は提言するまでもなく、誰の眼にも明らかである。ただ、まだ国内ですら十分に知られていない。これからマスコミ等への登場機会も増えるだろうが、もっと話題になっていい。そしてそのためにも、城下町、北前船寄港地、宮津湾や聖ヨハネ天主堂とともに宮津市の歴史と文化を深く掘り下げ、物語を発信し、日本海の真珠として輝く町を演出すべきだろう。日本海の美食都市宮津は、その豊かな食材だけでなく、歴史と文化を誇ってこそサンセバスチャンに匹敵する。

3-6. 芸術都市、丹後美術工芸展等、地元芸術家の物語

これまで述べたように、城下町の歴史と北前船寄港地としての文化的蓄積、宮津湾と伊根湾の海の恵みがあり、また丹後ちりめん機業による経済発展があり、宮津は丹後地方の拠点として栄えた。日本海沿いに寄港地は多いが、今も都市として栄えるのは、小樽、函館、酒田、秋田、新潟、敦賀など少ないが、中でも宮津は京都や大阪にも近く、明治時代以降も文化的発展を続け、数々の文化人を輩出した。明治時代に聖ヨハネ天主堂がパリ外国宣教会の手で建てられたのは、文化と同様にキリスト教を地域に広がるためだっただろう。実際、ルラーブ神父創立の京都暁星高校には昔、美術部があり、丹後一円の絵画愛好家が集まり、市内にたんご画材屋があった。

その歴史の影響もあったのだろう、1989 年に丹後美術工芸展が始まり今も毎年開催され、洋画、日本画、写真、陶芸、能面の五部門がある。アマチュアとはいえ、相当数の愛好家が宮津市民体育館に集うのは丹後には今も続く由緒と文化的風土があるのだろう。中丹や南丹、山城や乙訓と違い、人口規模が小さい丹後では、昔から芸術活動が活発だった。その伝統は今も続いている。

また、天橋立は千古の昔から詩歌の題材であり、雪舟の「天橋立図」はじめ美術工芸の源泉、作庭の借景に登場してきた。この特徴は、天橋立世界文化遺産登録のための推薦書に記されている。現代では、インスタレーション・アートの場となり、Horizon／インスタレーション・アート･イベント、2020 年 10 月、宮津・天橋立『天(アマ)への架け橋』デジタルアート/映像とサウンド、光インタラクティブインスタレーション／元伊勢籠神社をはじめ大小の芸術イベントが開催されてきており、よく知られる「瀬戸内国際芸術祭」に匹敵するアートイベントを開催する芸術都市を目指すことができるだろう。

3-7. 丹後郷土資料館リニューアル、文化史と民俗誌を再構築し、日本海の真珠の輝きを増す

2027 年 3 月に丹後郷土資料館の新館と本館リニューアルオープンする。1970 年、国史跡「丹後国分寺跡」に開設された京都府立丹後郷土資料館は、「ふるさとミュージアム丹後」と呼ばれ、55 年に渡って丹後地域に受け継がれた歴史と文化を守り伝え続けてきた。リニューアルで、その資料をもとに未来の文化創造の拠点となるよう歴史民俗と未来の融合を目指すという。

丹後の歴史･文化の探訪と観光の拠点として地域の様々な人々と文化を繋ぎ、交流と創造を育む『ハブ・ミュージアム』として、丹後の歴史･文化をコアに丹後地域の魅力を世界に発信、文化･観光･ 地域経済の活性化を牽引する、新ミュージアム「丹後歴史文化博物館」に再生される。

アドバイザーには、佐々木丞平名誉館長、元首相の細川護熙が就任し、すでに文化庁地域課題対応支援事業「文化資源の新たな魅力発信による文化観光拠点の形成 Innovate MUSEUM 事業」丹後地域の食文化（郷土料理「丹後ばらずし」）等の取り組みを始めている。

すでに 2015 年に、常設展示に物語性を付け、古代「丹後王国」、中世「天橋立周辺の寺社」、近世「北前船」の三テーマが設けられた。資料館には他にも、縄文遺跡の発掘品、弥生時代の集落や墳墓かからの出土品、続く古墳時代の出土品があり、丹後王国論の物語に通じる。

こうして、京都府立とはいえ丹後郷土資料館は、宮津市への貢献が大きかった。文化財はもとより、様々な文化資源の保存と活用、教育と学習機会の提供など地域社会の文化面での活性化など多岐にわたる。丹後の歴史や文化を伝え、市民のアイデンティティ形成やシビックプライドの醸成に寄与してきた。今までも観光資源として地域活性化に貢献してきた。これからも宮津市や丹後の文化遺産を未来へ継承する役割を担い、さらに宮津の文化を世界に発信する役割を担う。インバウンドの誘致や、宮津市が目指す世界の歴史都市との文化交流を通じて国際交流に貢献するだろう。この提言に述べた様々な宮津の文化遺産をこれまで以上に保存し、同時にその価値を世界に発信する役割が期待される。歴史文化の面から、宮津市を持続的に美しく保ち、豊かに実らせるふるさとミュージアムがリニューアルされることで、小さくとも光り輝く日本海の真珠／宮津が輝く。

宮津港円形と歴史の館

宮津湾遠景

三上家と **Velo** タクシー

宮津城太鼓門

文責・宗田好史